

日本医療薬学会 第 56 回公開シンポジウム開催報告書

第 56 回医療薬学公開シンポジウム

実行委員長 井関 健

平成 26 年 11 月 1 日（土）、北海道大学医学部学友会館フラテホール（札幌市）において、第 56 回医療薬学公開シンポジウム（主催：日本医療薬学会、共催：北海道薬剤師会、北海道病院薬剤師会、日本薬学会北海道支部）を開催した。本シンポジウムでは、テーマを「病棟業務から臨床支援業務へのパラダイムシフト」と題して、「病棟薬剤業務実施加算」の導入などにより大きく変わりつつある病院薬剤師業務にどう取り組んでいくかについて特別講演 1 演題と 5 つの施設による特徴ある取組みを紹介するシンポジウムから構成される企画を実施した。

特別講演では、神戸市立医療センター中央市民病院の院長補佐・薬剤部長 橋田 亨先生に「専門性を活かした薬剤業務のパラダイムシフト」と題して講演していただいた。講演の中で橋田先生は、診療科と協働して作成したプロトコールに基づく処方支援業務、服薬遵守率を高めるための薬剤師外来や入院前検査センターでの薬剤師の抗血栓薬服用者への対応など、病院のミッションに基づいた薬剤師の先進的な業務内容について紹介するとともに薬剤師の将来像についても熱弁を振るわれた。

その後のシンポジウム 5 題は、北海道内の病院施設で活躍している先生方から、それぞれの施設での特色ある取組について発表があった。まず、JA 北海道厚生連遠軽厚生病院薬剤科 棚谷 貢先生からは、「遠軽厚生病院における病棟業務の実際」と題して、人員配置だけでなく業務内容についても見直しをはかり効率的な病棟業務を展開している取組みが紹介された。次に、北海道消化器科病院薬剤部 鈴木直哉先生の発表では、「がん薬物治療における臨床支援業務～薬剤師による積極的な副作用マネジメントに向けて～」と題して、がん薬物治療の副作用マネジメントに対して薬剤師職能を積極的に活かすことで、患者 QOL を保ちながら治療を進める効果についての話がなされた。市立札幌病院薬剤部 大下 直宏先生は、「院内感染症診療に対する薬剤師の臨床支援～感染症診療サポートチームにおける薬剤師の役割～」と題して、感染制御のチーム医療における薬剤師の役割について、病棟薬剤師と ICT 薬剤師の連携や、血流感染コンサルテーションへの関与、また教育に係る病院薬剤師の重要性について発表した。次いで、旭川医科大学病院薬剤部の田原克寿先生には、「病棟薬剤師業務におけるプロトコールに基づく薬物治療管理」と題して、持参薬処方入力・入院患者 DO 処方などに関する院内プロトコールに基づいた薬剤師の処方支援への関わりについて詳細に解説をしていただいた。シンポジウム最後の演題は、「次世代型チーム医療構築の試み」と題して、北海道大学病院薬剤部 笠師久美子先生で、現在と近未来にわたって必要とされる病院薬剤師業務の構築・展開に関して、医療チームの中での連携の重要性や、同院で実施している新人・若手薬剤師の教育プログラムとその評価結果と展望について発表した。

質疑応答においては、フロアから活発な意見、質問が出され、また今回のシンポジウムは、208 名の参加があり、学生 33 名、一般 175 名（病院薬剤師 158 名、薬局薬剤師 2 名、学部教員 13 名、その他 2 名）大変盛況のうちに閉会した。